



街の中のやさな山

— 人と森林とコロナウイルス —

コロナウイルスにより、思う様に外に出かけることができなくなった今、住宅街にある公園はこれまで以上に重要な場になり得る。また、公園とは身近に自然(木)と触れ合う場ではないだろうか、公園のあり方を再確認するとともにそこが木育の場となることを目指す。



寝転んだ視線の先に、トッピングした緑の空を眺める
構造材: 秋田杉、間伐材の集成材 床材: ナラ材

階段がバス停にまで伸び、一体感が生まれる
バス停: 秋田杉 階段: ナラ材

右になると桜が咲く、アプターコロナにおいても人が集う場となる

木漏れ日の下で読書をする
ベンチ: 間伐材の集成材

ウッドチップを手で触り、肌で感じることで木と触れ合い木を知る

— 人とコロナウイルス —

旅行など遠くに出かけることができなくなった

リモートワークや自宅などから出ない生活による精神的疲弊

公園の重要性の再確認

外への活動が制限された今日、ちょっとした気分転換や健康維持などを理由に近隣の公園を利用する人が増えた。ウィズコロナ時代において、精神的疲弊を癒す場としてこれまで以上に重要な場ではないだろうか。

— 森林とコロナウイルス —

輸入材への依存

国内林の放置(過密)

国産材(見産材)の適切な利用

ウッドショック

木材価格高騰

木材不足によるウッドショックを受け、今後における国産材の積極的な利用は必要不可欠となると考えられる。さらに、その際に出る間伐材等も含めて総合的に国産材活用していくことは、持続可能な社会にも寄与する。

— 人と森林 —

「木と触れ合い」「木育」…人々が「木と学び」「木と生きる」

公園は身近に自然(木)と触れ合うことができる場ではないだろうか、そんな公園は木育の最適な場となると考えた。そこで、本計画では公園内において木の多様性を見せる。人々が森林との関わりを主体的に考えらさくけけを与え、木に対する関心を高める。

秋田県の木材

- スギ
- ナラ
- 間伐材(スギ・ナラ)
- 構造材
- 構造材(集成材)
- 床材
- ウッドチップ
- 木質系舗装

適材適所の利用

秋田県では秋田杉はもちろん、広葉樹のナラも森林資源として有効活用できる。それらを得意に合わせて空間に活用することで多様性の幅を広げる。

敷地 - 秋田県由利木荘市 -

本計画地は、由利木荘市の住宅街の中にある公園である。敷地内は木や芝といった緑はあるものの人が留まる居場所がほとんどない。本計画では現状の問題を解決しながら居場所を創出する。また計画敷地は市役所や消防署、さらには体育館が隣接している。体育館は普段から多世代の人が利用しており、人が集まるポテンシャルが備わっている。ゆえにアプターコロナにおいても人々が活用するよう場の計画を進めることとした。

— 空間構成 —

街に対して開く

現状では入り口が奥まった部分にあり、周囲よりレベルが高いことから街に対して閉鎖的なイメージを持った。敷地内には回遊性があるが内部に留まっている。そこで、動線を再編成し、街に対して開くことで、街に対して回遊性を持たせることで、人々を敷地内に受け入れる。

街として回遊性を持たせる

東屋

内部の様相が何いろい

様相が街へと溶け出す

計画地は歩道のレベルから少し高く内部の様相が何いろい。そこで、既存の中心部の余白部分に東屋を配置する。中心にシンボリックな要素を加えることで敷地内部の様相が街へと溶け出す。

ベンチ

湾曲集成材を用い、敷地や人の体に合わせたベンチは様々な使い方を可能にする。また木を曲げるような使い方をすることは木への学びにもつながる。

— 平面計画・断面計画 —

記念樹(桜)

マツ

石碑

既存平面図 1/400

平面図兼配置図 1/400

体育館

消防本部

木製チップエリア

柱頭残しによって山を作り、建築中に発生した廃材等を木質チップとして敷き詰める

湾曲集成材を用いたベンチ

木質チップを舗装材に混和させた木質系舗装

国産材の積極的な利用

傷み状態の木材は年月が進むにつれて腐朽していく。腐朽した部分は補修を行い、補修で出た木材は木質チップに細分化しエリアに敷く。最終的には土へと還元される。

森林 補修 木質チップ 土

駅方面

A-A' 断面図 1/150

夏は開放地、冬は直射日光を取り入れる

床を中心に回って傾斜をつける。空を見上げて気持ちリフレッシュさせる

空を解放することで通風する